

宮崎県内公立中学校生徒の精神心理健康レベルと 学校生活・学校運動部活動の満足感に関する研究

富永陽子^{*1} 金城史郎^{*2} 玉江和義^{*3}

An analytic study of relationships among psychosomatic status, daily school living,
and extra curricular sports club activity in public junior high-school students

Yoko TOMINAGA Shiro KINJO Kazuyoshi TAMAEC

Abstract

The questionnaire surveys was applied to a public junior high-school students in MIYAZAKI prefecture, in order to investigate the influence of satisfaction of extra curricular sports club activity (ECSA) on actual psychosomatic status and a feeling of adequate daily living. Available data were obtained from 120 students, yielding an effective response rate of 87.0%. The CES-D score was common level as compared with other Japanese adolescents. A psychosomatic condition level was higher among a participants of ECSA than non-participants. As the results of factor analyses, the explanatory of variance indicated that any factor extracted has stable structure, moreover, each factor structure also supported the above visual inspection. Gender and grade difference were observed among ECSA factor scores. The psychosomatic status of a sample of 120 students were related to satisfaction in extra curricular sports club activity, particularly negative emotion to sports activities, rather than positive ones. These suggested that actual situations of ECSA were the main health factor among adolescents, and also the dimensionality of satisfaction to ECSA might vary across ages/grades.

I. 緒言

思春期である中学生期は、学校内外での生活や家族関係、友達関係などで苦悩することが多い。これらはストレス要因として認識できるものであり、中学生の精神心理健康に大きく影響を与えていることが確認⁴⁾ ⁵⁾ ¹⁶⁾ ²¹⁾–²³⁾ されている。最近では、その要因の一つとして、学校運動部活動の存在も挙げられている。健全な心身を維持増進するために必要と考えられている運動やスポーツを用いた教育活動に、ストレッサーとしての側面が付随することは見逃せない事

^{*1}日南市立細田中学校 ^{*2}宮崎大学大学院教育学研究科修士課程 ^{*3}宮崎大学教育文化学部

実である^{4) 5)}。

学校運動部活動の目的は、中学校学習指導要領第2章各教科第7節保健体育（解説）²⁰⁾に詳しい。すなわち、運動部活動の目的とは、より高い技能や記録への挑戦を通して生徒に運動の楽しさや喜びを付与するとともに、豊かな学校生活を経験させることで体力向上・健康増進につなげること、能力等に応じた技能や記録の向上を目指しながら好ましい人間関係を育てることができるようにすること、である。これらを達成するためには、生徒の自主性の尊重と、勝利のみに傾倒しない生徒の能力・適性、興味・関心等を充分に考慮した指導が必要とされる。そのため、顧問教師においては、相応の経験や力量が求められることになる。

ところが、学校運動部活動の現行の運営システムをみると、顧問教師への配慮が充分備えられているとはいえない。たとえば、スポーツキャリアの有無や種目指導に対する得意・不得意などを問わずして、おおよそ学校の状況に応じた形で顧問教師が配置されているという事実。あるいは、校長の学校運動部活動に対する価値観によって、学校運動部活動に割かれる質（教師の熱意や環境条件の整備）や量（時間）が、左右されることも少なくない。志望する学校運動部活動が閉鎖されている、もしくは、活発とはいえない停滞した状況にある、などの実態を見て、学校運動部活動への意欲・期待・関心に水を差される生徒も多い。加えて、教師は公務のみで既に多忙であるが、学校運動部活動の教育的・指導上の意義を認識するがゆえに部活動顧問教師を引き受けているとの指摘¹⁰⁾もある。教師各々における学校運動部活動に対する価値観の相違もさることながら、学校運動部活動の指導に対する適性や力量などで悩む教師が少くないのが実情である。この点が、学校運動部活動に対する教師の苦手意識や失敗の要因になっていることは否定できない。

学校運動部活動に対する認識や意識が、教師と生徒との間で異なっていることも見逃せない事実である。教師の立場に立脚すると、学校運動部活動とは課外活動としての教育活動であり、生徒にとっては、学校課程内では發揮できない自己主張を伴った個性を表現することができる場である。しかしながら、いずれの立場に立つにせよ、生徒の健全な心身育成と健康生活の設計に対し、学校運動部活動が多大な貢献力を有することは疑いようのない事実である。それゆえ、円滑な学校保健推進を講じる上で、学校運動部活動の実情を客観的に検討することは意義深いといえる。

しかしながら、学校運動部活動による効果を精緻に評価・検討するためには、学校運動部活動のみに目を向けるだけでは不充分である。たとえば、学校運動部活動による効果とは、その良悪を問わずして、学校運動部活動以外でも發揮されるものである。学校生活全般ならびに家庭においてこそ発露されるものであるといつても過言ではない。この点を充分に考慮した研究デザインとして、生徒自身の心身の健康状態や学校生活全般における主観的な満足・充足感を測定・評価し、これら知見と学校運動部活動満足感の関連構造を抽出することが必要となるであろう。そして、これらを学年別・性別に検討することにより、学校運動部活動がもつポジティブあるいはネガティブな影響の一端を具体的に示すことが可能となるであろう。

そこで本研究では、中学生を対象にして以下の点を目的に質問紙調査・検討を行なった。すなわち、1) 本対象生徒の精神心理健康レベルを学年別・性別・部活動参加別に比較し特徴を得ること、2) 精神心理健康レベルと生活満足感・学校生活満足感・部活動満足感との各関連要因を検討すること、3) 学校保健活動及び学校運動部活動を推進していく上での資料としての有用性を考究すること、である。

II. 方法

1. 調査対象校

本調査対象校は、宮崎県の南部に位置しており、全校生徒138名の小規模校である。当地域の中心産業は、漁業、農業、畜産業と幅広く、生徒の居住区も、沿岸部から山間部まで広い範囲に位置している。学校部活動については、96.0%と高い入部率である。全国大会や九州大会への出場などのような著しい成績は多くないが、県大会に出場する部もいくつかあり、日々の練習に地道に取り組んでいる。

2. 調査の方法

2006年12月、宮崎県内某公立中学校生徒138名（第1学年42名、第2学年49名、第3学年47名）を対象に、「現在の学校生活における満足感に関する調査票」と題する質問紙調査を行なった。すでに第3学年は部活動を引退していたため、2006年6月の某地区中学校体育大会直前を想起して回答するよう指示した。質問紙の配付・回収は各学級担任に依頼した。対象者の内訳を、表1に示す。

表1 対象者の内訳

		部活動		小計	合計
		参加者	非参加者		
1年生	男子	21	0	21	42
	女子	18	3	21	42
2年生	男子	22	2	24	49
	女子	24	1	25	49
3年生	男子	28	1	29	47
	女子	17	1	18	47
小計	男子	71	3	74	
	女子	59	5	64	138
合計		130	8		

3. 調査内容

本調査内容には、学年、性別、所属する運動部活動などの一般情報項目のほか、以下の質問項目を設定した。

(1). 抑うつ症状

生徒の心身健康レベルを測定するため、Center for Epidemiologic Studies Depression scaleの日本語版（CES-D）を適用した。CES-Dは、うつ病の疫学研究のために米国のNational Institute of Mental Healthにおいて開発された20項目4回答選択肢からなる自己評価尺度であり、米国では、思春期についてもその妥当性が確認されている。また、CES-Dは、20項目中16項目はnegativeな表現項目で、4項目はpositiveな表現項目で構成されている。我が国でも、成人対象において信頼性・妥当性が確認されているほか、思春期への適用例^{4) 5) 7) 21) -23)}も報告されている。

(2). 満足感

対象者の満足感を測定する変数として、3つの暫定尺度を作成した。一つは、中学生の生活全般における満足度を測定するため、鈴木⁸⁾の「生活満足感尺度」を参考にして、16項目5回答選択肢からなる暫定尺度を作成した。ここ最近の経験頻度を抽出することをねらいとし、各回答選択肢は、「よくあてはまる」「だいたいあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5段階とした。加えて、岡安ら²⁾の「中学生用学校ストレス反応尺度」と古市³⁾の「学校嫌い感情測定尺度」を参考に、30項目からなる学校生活満足感尺度と、59項目からなる部活動満足感尺度を作成した。この二つの尺度の回答選択肢は、「よくあつた」「時々あつた」「ほとんどなかつた」「全然なかつた」の4段階回答であり、ここ2～3ヶ月の間に生じた出来事や事象について尋ねるものである。

4. 分析

(1). 基礎統計量の算出

全体および属性別（学年別・性別・部活動参加別）に、全変数の分布、平均、合計得点、合成得点、標準偏差、標準誤差などを算出し、群間差を求めた。

(2). 学校生活満足感および部活動満足感の因子分析

学校生活満足感および部活動満足感を測定する項目は、独自作成によるものであるため、因子分析法によって因子構造を明らかにした。解析には主因子法を用い、固有値1.0以上の基準及び、第1因子からの固有値の減少傾向（スクリープロット）を考慮し、因子数を暫定的に定めた。この因子数を中心に因子の直交回転（Varimax法）を行なった。因子解釈妥当性及び累積寄与率を検討し、最終因子数を定めた。因子解釈は、因子負荷量の大きい項目を中心に行なった。各因子合成得点は、比較・分析に用いた。

(3). 当該変数間の相関

CES-D得点、生活満足感尺度得点そして学校生活満足感および部活動満足感における各下位尺度得点（因子合成得点）の間の関連性を分析した。

これら分析においては、群間の有意差検定として、T検定（T-test）、一元配置分散分析（ANOVA）及び多重比較検定（Scheffe's Test）を適用し、群間の相関分析として、Spearmanの順位相関係数とG-P（Good-Poor）分析を用いた。以上の分析は、有意水準を5%とし、SPSS 11.0 Version for Windowsを用いて行なった。

III. 結果

1. CES-Dスコア

図1に本対象者のCES-D得点の分布を示す。得点は0～55点の間に分布しており、全体のCES-D平均得点は、17.34点、標準偏差（SD）は10.22点であった。さらに、属性別による平均得点を、表2に示している。学年別では、1年生が21.14点、2年生が17.30点、3年生が14.37点であり、学年間に有意差が認められた。とりわけ、1年生は3年生と比較して、著しく高かった（P<0.05）。性別では、男子13.04点、女子22.08点で、女子の方が顕著であった（P<0.01）。部活動の参加者と非参加者の得点は、それぞれ16.59点、27.75点であり、非参加者の方が著しいスコアを示した（P<0.01）。

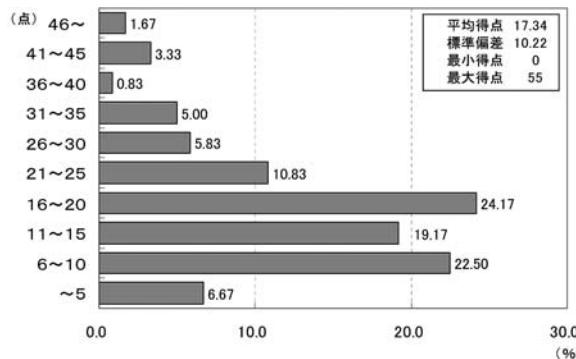


図1 本対象集団のCES-D得点の分布

表2 CES-D得点の学年間・性別間・部活動参加別間の比較

	N	平均	SD	P	Scheffe
学年	1年生	34	21.14	11.50	* 3年<1年 *
	2年生	43	17.30	8.57	
	3年生	43	14.37	9.87	
性別	男子	63	13.04	7.27	**
	女子	57	22.08	10.93	
部活動	参加者	112	16.59	9.42	**
	非参加者	8	27.75	15.28	
	全対象者	120	17.34	10.22	

注1) *: P<0.05, **: P<0.01

注2) 学年差は一元配置分散分析、性差・部活動参加別差はT-testにより検定を行なった。

2. 学校生活満足感項目の因子構造

学校生活満足感項目の因子構造を、表3に示す。第1因子は，“学校がイヤだ”，“学校さえなければ毎日楽しいと思う”，“学校が終わったら早く家に帰りたい”，“できれば学校なんかなくなればよいのにと思う”といった、学校そのものに対する否定的な感情を含んだ項目が上位にあることから、「学校嫌い」と解釈した。第2因子は，“先生がえこひいきをした”，“先生から自分と他人を比べるような言い方をされた”，“自分は悪くないのに先生から叱られたり注意されたりした”，“先生から無視された”など、教師から受ける不快な感情を意味する項目が多く、「教師に対する否定的感情」と解釈した。第3因子は，“テストや学習成績一覧表の成績が悪かった”，“先生や家人から期待されるような成績がとれなかった”，“一生懸命勉強したのに成績が伸びなかつた”，“テストや成績のことが気になった”，“友達が簡単にできる問題も自分にはできなかつた”などのような、学業に対する関心や自信のなさにかかわる項目が上位にあることから、「学業不振」と解釈した。第4因子は，“誰かにいじめられた”，“自分の性格のことや自分のしたことによって友達から悪口を言われた”，“学級の友達から仲間はずれにされた”，“友達から暴力をふるわれた”など、友達から受けた不快な経験や感情が上位にあり、「友達からのいじめ」と解釈するのが妥当であった。この4因子により全変動成分の57.07%（累積寄与率）が説明される。

表3 学校生活満足感項目における因子構造

因子解釈及び項目	因子負荷量				共通性
	F1	F2	F3	F4	
学校嫌い					
この学校がイヤだと思うこと	0.85	0.11	0.01	0.11	0.74
学校さえなければ毎日楽しいと思うこと	0.79	0.23	0.19	-0.03	0.71
学校が終わったら早く家に帰りたいと思うこと	0.78	0.19	0.14	0.04	0.67
できれば学校なんかなくなればよいと思うこと	0.75	0.25	0.23	0.07	0.68
学校にいると気が重いと思うこと	0.71	0.00	0.11	0.28	0.60
学校がイヤで転校したいと思うこと	0.68	-0.04	0.02	0.35	0.58
朝起きてなんとなく学校に行きたくないと思うこと	0.60	0.18	0.17	0.11	0.43
今の学級は居心地がよくないと思うこと	0.60	-0.02	0.13	0.37	0.51
日曜の夜、また明日から学校かと思うと気が重くなること	0.55	0.23	0.17	0.08	0.39
教師に対する否定的感情					
先生がえこひいきをしたこと	0.13	0.83	-0.03	0.20	0.75
先生から自分と他人を比べるような言い方をされたこと	0.17	0.83	0.08	0.15	0.74
自分は悪くないのに先生から叱られたり注意されたこと	0.01	0.80	0.07	0.14	0.67
先生から無視されたこと	0.04	0.79	0.04	0.13	0.65
先生から自分を理解してくれなかつたこと	0.12	0.76	0.02	0.14	0.60
先生のやり方やものの言い方が気に入らなかつたこと	0.23	0.73	0.21	-0.22	0.68
先生がわかりやすく丁寧に教えてくれなかつたこと	0.29	0.60	0.22	-0.08	0.50
学業不振					
テストや学習成績一覧表の成績が悪かったこと	0.11	0.00	0.78	0.21	0.66
先生や家人から期待されるような成績がとれなかつたこと	0.06	0.12	0.72	0.29	0.63
一生懸命勉強したのに成績伸びなかつたこと	0.21	0.19	0.65	0.00	0.50
テストや成績のことが気になつたこと	-0.14	0.22	0.63	0.00	0.47
友達が簡単にできる問題も自分にはできなかつたこと	0.44	0.08	0.62	0.14	0.60
授業中、指名されても答えられなかつたこと	0.31	-0.14	0.58	0.16	0.48
授業の内容や先生の説明がわからなないこと	0.16	0.06	0.51	-0.25	0.35
テストがたくさんあつたけど自分のためになつていいないと感じたこと	0.42	-0.01	0.50	0.11	0.44
友達からのいじめ					
誰かにいじめられたこと	0.23	0.04	0.02	0.69	0.54
友達から暴力をふるわれたこと	0.01	0.23	-0.03	0.68	0.51
学級の友達から仲間はずれにされたこと	0.39	-0.01	0.08	0.63	0.55
自分の性格や自分のしたことについて友達から悪口を言わされたこと	0.17	0.17	0.30	0.62	0.53
学級の異性から嫌われたこと	0.34	-0.07	0.11	0.58	0.47
顔やスタイルのことでの友達にからかわれたり、ばかにされたりしたこと	-0.02	0.38	0.14	0.56	0.47
因子負荷量の二乗和	5.61	4.74	3.61	3.16	17.12
寄与率 (%)	18.70	15.79	12.04	10.54	57.07

注) 桁内は0.40以上の因子負荷量を示す

3. 部活動満足感項目の因子構造

部活動満足感項目の因子構造を、表4に示す。第1因子は、“部活なんてなくなればいいのにと思ったこと”, “練習がつらいと思ったこと”, “部活動をやめたいと思ったこと”, “練習試合などで、体力的にきつくて、ついていけないと思ったこと”といった、部活動全般へのネガティヴなイメージが上位にあることから、「部活動に対する否定的感情」と解釈した。第2因子は、“自分のプレーに自信がないと感じたこと”, “練習や練習試合などで、自分の役割を果たすことができなかつたと感じたこと”, “自分のプレーがなかなか上達しないと感じたこと”, “自分が思った通りに動くことができなかつたこと”など、自信のなさによる自分自身へのもどか

表4 部活動満足感項目における因子構造

因子解釈及び項目	因子負荷量							共通性
	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	
部活動に対する否定的感情								
部活なんてなくなればいいのにと思ったこと	0.79	0.34	0.19	-0.04	-0.05	0.12	-0.06	0.80
練習がつらいと思ったこと	0.79	0.12	0.05	0.26	-0.11	0.20	0.14	0.77
部活動をやめたいと思ったこと	0.78	0.22	0.18	-0.02	0.06	0.06	0.02	0.70
練習試合などで、体力的にきつくて、ついていけないと思ったこと	0.77	0.24	0.25	0.15	0.16	-0.04	-0.06	0.77
練習試合や大会がつらいと思ったこと	0.75	0.14	0.16	-0.09	0.09	0.13	-0.11	0.66
部活動は自分のためにならないと思ったこと	0.72	0.37	0.19	-0.11	0.00	0.15	-0.10	0.73
練習で、体力的にきつくて、ついていけないと思ったこと	0.72	0.32	0.26	0.15	0.05	-0.06	0.00	0.72
練習内容がきびしいと思ったこと	0.70	0.13	0.05	0.27	-0.02	0.06	0.24	0.64
練習試合や大会が多いと感じたこと	0.67	0.01	0.21	0.00	0.39	-0.12	-0.12	0.67
部活動の休みが少ないと感じたこと	0.65	0.04	-0.01	0.31	0.09	0.15	0.05	0.56
練習時間が長いと感じたこと	0.65	0.14	0.04	0.12	-0.01	0.31	0.04	0.55
練習の内容が理解できなかったこと	0.60	0.05	0.10	0.21	0.36	0.38	-0.07	0.70
練習時間が短いと感じたこと	-0.54	0.07	0.20	0.15	0.37	-0.17	0.04	0.53
自信喪失・自己無力感								
自分のプレーに自信ない、と感じたこと	0.27	0.73	0.01	0.15	0.21	-0.14	0.18	0.73
練習試合などで自分の役割を果すことができなかつたと感じたこと	0.25	0.73	0.01	0.13	0.17	-0.15	0.17	0.69
自分のプレーがなかなか上達しないと感じたこと	0.15	0.69	-0.03	0.39	0.23	-0.07	0.10	0.72
練習で自分は手を抜いていると感じたこと	0.26	0.65	0.08	-0.16	0.14	0.37	0.10	0.69
練習で自分の役割を果すことができなかつたと感じたこと	0.36	0.63	0.01	0.27	0.12	-0.19	0.13	0.67
自分が思った通りに動くことができなかつたこと	0.13	0.63	-0.11	0.26	0.11	0.13	0.37	0.66
練習試合や大会で自分は手を抜いている、と感じたこと	0.28	0.55	0.24	-0.09	0.13	0.25	-0.15	0.55
勉強と部活動の両立が難しいと感じたこと	0.23	0.49	0.16	0.06	0.17	0.05	0.13	0.36
部内のいじめと人間関係								
下級生から仲間はずれにされたこと	0.14	0.04	0.80	0.01	0.09	0.17	-0.05	0.71
先生から無視されたこと	0.07	0.05	0.67	0.09	0.08	0.27	0.04	0.54
下級生から冷たくされた、と感じたこと	0.28	0.02	0.66	-0.15	0.19	0.07	0.08	0.59
友達から仲間はずれにされたこと	0.06	0.22	0.61	0.18	-0.02	0.27	0.11	0.54
友達から冷たくされた、と感じたこと	0.23	0.36	0.59	0.15	-0.24	0.15	0.19	0.66
下級生の態度がきついと感じたこと	0.12	-0.08	0.57	0.07	0.23	0.00	-0.04	0.41
下級生に自分のプレーを注意されたこと	0.04	-0.15	0.56	0.39	0.26	0.02	-0.15	0.59
先生から冷たくされた、と感じたこと	0.35	0.22	0.55	0.22	-0.28	-0.01	-0.03	0.60
活動時に受ける個人的な注意								
先輩に自分のプレーを注意されたこと	0.03	0.25	0.08	0.76	0.04	0.09	-0.06	0.66
先生に自分のプレーを注意されたこと	0.27	0.12	0.00	0.75	0.10	0.08	0.18	0.70
先輩から練習態度を注意されたこと	0.11	-0.01	0.26	0.64	0.11	0.20	0.17	0.57
友達から練習態度を注意されたこと	-0.02	0.07	0.47	0.63	0.11	0.06	0.05	0.65
友達に自分のプレーを注意されたこと	0.21	0.37	0.08	0.61	-0.17	0.22	0.04	0.65
上昇志向								
自分の部活動がもっと活気があるといいのに、と思ったこと	0.16	0.03	0.09	0.14	0.75	-0.03	0.26	0.68
悪い雰囲気のまままで目標達成は難しいと感じたこと	0.15	0.35	-0.02	0.00	0.73	0.18	-0.05	0.71
部内の雰囲気が悪いと感じたこと	0.09	0.38	0.10	0.16	0.59	0.00	-0.10	0.55
もっと部活動に集中したい、と思ったこと	-0.08	0.23	0.17	0.15	0.57	-0.15	0.28	0.54
自分のチームに自信が持てない、と感じたこと	0.28	0.38	0.18	-0.11	0.51	0.12	-0.03	0.55
部活をやるために学校に来ている、と思ったこと	-0.18	0.10	0.19	-0.11	0.50	0.04	0.43	0.53
部内における疎外感								
先生がていねいにわかりやすく教えてくれなかつたこと	0.26	0.03	0.26	0.21	-0.08	0.68	0.04	0.65
友達がていねいにわかりやすく教えてくれなかつたこと	0.18	-0.02	0.46	0.21	-0.04	0.66	0.01	0.73
先輩がていねいにわかりやすく教えてくれなかつたこと	0.31	-0.13	0.27	0.21	0.06	0.65	0.06	0.66
下級生がていねいにわかりやすく教えてくれなかつたこと	0.03	-0.16	0.42	0.19	0.22	0.49	-0.20	0.57
自分が発揮している実力は今まで十分だ、と感じたこと	0.14	0.36	0.04	-0.01	-0.16	0.45	-0.40	0.54
主体的な向上心								
自分が思った通りに動けなくて悔しいと思ったこと	0.04	0.36	-0.01	0.24	0.07	-0.10	0.71	0.70
自分が我慢強くなつた、と感じたこと	0.31	0.13	0.12	-0.03	0.07	0.24	0.66	0.63
部活動のなかでチームワークなんて必要無い、と思ったこと	0.19	0.18	0.13	-0.08	0.28	0.45	-0.60	0.72
練習試合や大会で負けて悔しいと思ったこと	-0.04	0.48	-0.03	0.23	0.16	-0.13	0.59	0.68
部活動のなかで人に負けたくない、と思ったこと	-0.17	0.34	-0.01	-0.01	0.36	0.07	0.56	0.59
因子負荷量の二乗和	7.95	5.51	4.65	3.75	3.68	3.16	3.07	31.77
寄与率 (%)	15.90	11.02	9.31	7.51	7.35	6.32	6.13	63.54

注) 框内は0.40以上の因子負荷量を示す

しさを窺わせる項目や，“練習や練習試合，大会などで自分は手を抜いていると，感じたこと”といった，自分自身への甘えともとれる項目が多くあり，「自信喪失・自己無力感」と解釈した。第3因子は，“下級生や友達から仲間はずれにされたこと”，“先生から無視されたこと”，“下級生や友達から冷たくされたこと”などのような，人間関係がうまく機能していない様子が窺えるため，「部内におけるいじめと人間関係」と解釈した。第4因子は，“先輩に自分のプレーや練習態度を注意されたこと”，“先生や友達から自分のプレーを注意されたこと”といった，部活動中の他者からのかかわりが上位にあることから，「活動時に受ける個人的な注意」と解釈した。第5因子は，“自分の部活動がもっと活気があるといいのにと思ったこと”，“(自分の所属する部内が)悪い雰囲気のままで目標達成は難しいと感じたこと”，“もっと部活動に集中したいと思ったこと”など，部活動に対する前向きな思いや願いを含んだ項目が多いことから，「上昇志向」と解釈した。第6因子は，“先生や友達，先輩，下級生がていねいに，わかりやすく教えてくれなかったこと”，“自分が発揮している実力は今のままで十分だ，と感じたこと”といった，部内の人間関係に基づく寂しさや諦めが窺えるため，「部内における疎外感」と解釈した。第7因子は，“自分が思った通りに動けなくて悔しいと思ったこと”，“自分が我慢強くなったりを感じたこと”，“練習試合や大会で負けて悔しいと思ったこと”など，部活動を通して生徒自らが感じた悔しい思いや手ごたえ，部活動全体に対するポジティブな思いが窺えるため，「主体的な向上心」と解釈した。これら7因子で，全変動成分の63.54%（累積寄与率）が説明される。

4. 各満足感項目における各因子得点と学年間・性別間の比較

生活満足感項目及び学校生活満足感項目の因子合計得点の平均値を，学年別・性別に示しているのが表5である。生活満足感項目では，学年間，性別間ともに，有意差は見られなかった。学校生活満足感項目では，全ての因子で，属性間の統計的有意差が認められた。すなわち，性差では，「学業不振」に認められ，女子に高くなっていた ($P < 0.05$)。学年差では，「学校嫌い」，「教師に対する否定的感情」，「友達からのいじめ」において認められ ($P < 0.05 \sim 0.01$)，とりわけ，3年生に比して，2年生が高くなっていた ($P < 0.05 \sim 0.01$)。

表5 学年別・性別にみた生活満足感項目及び学校生活満足感項目の因子合計得点の平均値

各満足感項目	性別			学生			Scheffe
	男子 (N=53)	女子 (N=48)	P	1年生 (N=26)	2年生 (N=37)	3年生 (N=38)	
生活満足感項目							
F1 全般的生活満足感	7.02	7.71		8.07	7.27	6.92	
F2 友達関係満足感	13.85	14.37		14.46	13.81	14.13	
F3 学校生活満足感	8.02	8.60		8.61	8.32	8.05	
学校生活満足感項目							
F1 学校嫌い	8.28	8.79		9.46	10.49	5.97 *	3年生 < 2年生 *
F2 教師に対する否定的感情	6.25	5.96		5.35	8.37	4.42 **	3年生 < 2年生 *
F3 学業不振	10.21	12.63 *		11.23	11.73	11.08	
F4 友達からのいじめ	4.08	4.77		4.81	5.68	2.90 **	3年生 < 2年生 **

注1) *: $P < 0.05$ **: $P < 0.01$

注2) 性差はT-test、学年差は一元配置分散分析により検定を行なった。

表6 学年別・性別にみた部活動満足感項目の因子合計得点の平均値

満足感項目	性別			学生			Scheffe
	男子 (N=48)	女子 (N=37)	P	1年生 (N=14)	2年生 (N=33)	3年生 (N=38)	
部活動満足感項目							
F1 部活動に対する否定的感情	9.67	14.62	*	6.43	16.61	9.66	** 1年生<2年生** 3年生<2年生**
F2 自信喪失・自己無力感	10.65	14.38	**	9.36	14.73	11.21	*
F3 部内におけるいじめと人間関係	1.71	2.11		0.71	3.33	1.05	*
F4 活動時に受ける個人的な注意	5.38	5.81		6.00	6.15	4.90	
F5 上昇志向	7.04	7.30		4.79	9.46	6.03	** 1年生<2年生** 3年生<2年生**
F6 部内における疎外感	1.90	2.16		1.36	2.85	1.53	
F7 主体的な向上心	7.52	9.51	**	6.29	9.18	8.47	** 1年生<2年生**

注1) *: P<0.05 **: P<0.01

注2) 性差はT-test、学年差は一元配置分散分析により検定を行なった。

表6に、部活動満足感項目の各因子合計得点を、学年別・性別に示す。計5因子に有意差が認められた。性差は、「部活動に対する否定的感情」、「自信喪失」、「主体的な向上心」に認められ、女子に顕著であった ($P < 0.05 \sim 0.01$)。学年差は、「部活動に対する否定的感情」、「自信喪失・自己無力感」、「部内におけるいじめと人間関係」、「上昇志向」、「主体的な向上心」で認められた ($P < 0.05 \sim 0.01$)。特に、1・3年生に比べ2年生が高くなっていた ($P < 0.05 \sim 0.01$)。

5. 部活動満足感項目とCES-D得点・学校生活満足感項目との関連性

表7には、各因子合計得点の平均値、および、その値に基づいたGood群とPoor群の割合を示している。第1因子「部活動に対する否定的感情」では、Good群が61.4%に対し、Poor群が38.6%であった。第2因子「自信喪失・自己無力感」では、Good群が46.6%，Poor群が53.4%であった。同じく、第3因子「部内におけるいじめと人間関係」、第4因子「活動時に受ける個人的な注意」では、Good群69.2%，Poor群30.8%，および、Good群53.4%，Poor群46.6%であった。第5因子「上昇志向」、第6因子「部内における疎外感」、第7因子「主体的な向上心」は、順に、58.8%と41.2%，61.0%と39.0%，そして41.3%と58.7%であった。

表7 平均値に基づいた部活動満足感の各因子別Good-Poor(G-P)分析

	部活動満足感項目						
	F1 部活動に対する否定的感情	F2 自信喪失・自己無力感	F3 部内のいじめと人間関係	F4 活動時に受ける個人的な注意	F5 上昇志向	F6 部内における疎外感	F7 主体的な向上心
平均 (N)	12.10 (114)	12.25 (118)	2.24 (107)	5.62 (116)	7.08 (119)	2.28 (100)	8.38 (121)
平均以下(Good) (N)	6.25 (70)	6.91 (55)	4.32 (74)	2.40 (62)	3.87 (70)	3.61 (61)	5.76 (50)
平均以下(Poor) (N)	21.39 (44)	16.92 (63)	6.30 (33)	9.31 (54)	11.65 (49)	5.28 (39)	10.23 (71)

表8には、各部活動満足感因子平均得点に基づいたPoor数による対象者のグループ分類を示している。すなわち、Poor数1個以下（1因子以下）は、「良好群」とし、対象者のうち28.2%が含まれていた。Poor数2～4個は、「普通群」とし、44.7%であった。そして、5個以上のPoor数を有したものは、「不良群」(27.1%)と分類した。

表8 各部活動満足感因子平均得点に基づいたPoor数による分析グループ化

Poor数		
良好群 (N)	0-1 (24)	28.20%
普通群 (N)	2-4 (38)	44.70%
不良群 (N)	5-7 (23)	27.10%

図2には、Poor数の類型化による「良好群」・「普通群」・「不良群」と、「CES-D得点」・「学業不振」・「友達からのいじめ」との関連について示している。CES-D得点では、「良好群」と

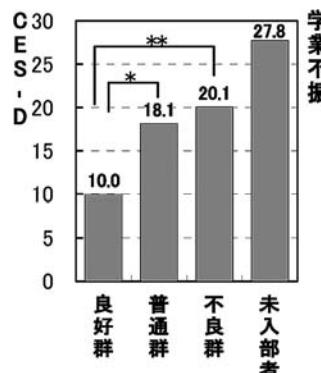


図2-A

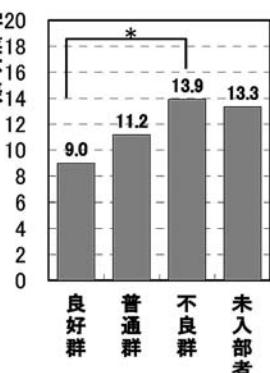


図2-B

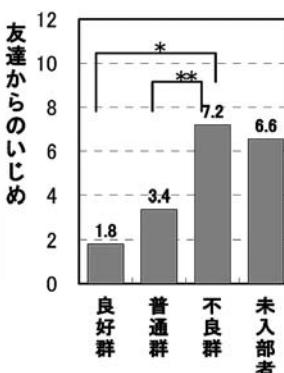


図2-C

図2 部活動満足レベル別に見たCES-D得点, 学業不振得点, 友達からのいじめ得点

「普通群」、ならびに、「良好群」と「不良群」($P < 0.05 \sim 0.01$)の間で有意性が示され、「不良群」になるほどCES-D得点が高い傾向であった。また、「学業不振」因子得点では、「良好群」と「不良群」($P < 0.05$)の間に著しい差が示され、「不良群」になるほど高い得点であった。「友達からのいじめ」因子得点では、「良好群」と「不良群」、「普通群」と「不良群」($P < 0.01$)との間に、顕著な有意性が検出され、不良な傾向である群ほど高い得点であった。

6. CES-D得点と関連要因項目得点との関連性

CES-D得点と、生活満足感項目ならびに学校生活満足感項目の各因子得点との関連性を、学年別・性別に分析した結果を、表9に示している。すなわち、当該変数間におけるSpearmanの順位相関係数を算出した結果を示している。

全生徒を分析対象とする生活満足感項目では、「全般の生活満足感」と「学校生活満足感」で関連の有意性($P < 0.05 \sim 0.01$)が示された。学校生活満足感項目では、第2因子「教師に対する否定的感情」以外の3因子($P < 0.01$)で、有意な関連を認めた。学年別には、生活満足感項目では、有意性は示さなかった。しかしながら、学校生活満足感項目は、どの学年も1つ以上の関連の有意性を示していた。また、学年間で関連傾向は一致していなかった。性別には、生活満足感項目では、男子で第2因子「友達関係満足感」以外の2因子($P < 0.05 \sim 0.01$)で、関連の有意性を認めた。女子では、1因子のみであり、第1因子「全般的な生活満足感」($P < 0.01$)が有意な関連であった。学校生活満足感項目では、男子が第4因子「友達からのいじめ」($P < 0.05$)で有意な関連を示していたが、女子では第2因子「教師に対する否定的感情」以外の3因子($P < 0.01$)で、関連の有意性を認めた。

同様に、CES-D得点と、部活動満足感項目の各因子得点との関連性を学年別・性別に分析した結果を表10に示す。部活動参加者のみを対象として分析した部活動満足感項目では、7因子全て($P < 0.05 \sim 0.01$)において、関連の有意性を認めた。学年別では、学年間での関連傾向は一致していなかったが、2つ以上の関連の有意性が認められた。性別には、男子で第2因子「自信喪失・自己無力感」、第4因子「活動時に受ける個人的な注意」、第5因子「上昇志向」、第7因子「主体的な向上心」($P < 0.05 \sim 0.01$)で、関連の有意性を認めた。女子では、第1因子「部活動に対する否定的感情」、第3因子「部内におけるいじめと人間関係」、第5因子「上昇志向」($P < 0.05 \sim 0.01$)で、有意な関連が示された。また、性別間での関連傾向は、第5因子「上昇志向」($P < 0.05 \sim 0.01$)で認められた。

表9 学年別・性別にみたCES-D得点と生活満足感・学校生活満足感項目の因子得点との関連性

各満足感項目	CES-D得点					
	学年			性別		全対象者 N=92
	1年生 N=22	2年生 N=34	3年生 N=36	男子 N=46	女子 N=46	
生活満足感項目						
F1 全般的な生活満足感	0.36	0.32	0.32	0.34*	0.42**	0.35**
F2 友達関係満足感	0.08	-0.12	0.16	0.16	-0.11	0.01
F3 学校生活満足感	0.24	0.18	0.40	0.40**	0.05	0.22*
学校生活満足感項目						
F1 学校嫌い	0.49*	0.05	0.27	0.27	0.52**	0.35**
F2 教師に対する否定的感情	0.01	0.22	0.19	0.19	0.22	0.19
F3 学業不振	0.52*	0.36*	0.28	0.28	0.37*	0.37**
F4 友達からのいじめ	0.44	0.49**	0.35*	0.35*	0.47**	0.43**

注1) Spearmanの順位相関係数

注2) *: $P < 0.05$ **: $P < 0.01$

表10 学年別・性別にみたCES-D得点と部活動満足感項目の因子得点との関連性

各満足感項目	CES-D得点					
	学年			性別		全対象者 N=70
	1年生 N=9	2年生 N=29	3年生 N=32	男子 N=35	女子 N=35	
部活動満足感項目						
F1 部活動に対する否定的感情	0.67*	0.35	0.29	0.28	0.39*	0.42**
F2 自信喪失・自己無力感	0.61*	0.42*	0.33	0.48**	0.16	0.45**
F3 部内におけるいじめと人間関係	0.18	0.48**	0.02	0.03	0.43**	0.28*
F4 活動時に受けける個人的な注意	0.12	0.46*	0.08	0.33*	0.22	0.29*
F5 上昇志向	0.47	0.21	0.38*	0.47**	0.37*	0.40**
F6 部内における疎外感	0.38	0.27	0.22	0.26	0.26	0.27*
F7 主体的な向上心	0.31	0.43*	0.38*	0.42**	0.04	0.36**

注1) Spearmanの順位相関係数

注2) *: P<0.05 **: P<0.01

IV. 考察

1. 本対象者の抑うつレベル

本対象集団のCES-D得点の平均は、17.34±10.22点であった。中学生を対象に実施された先行研究結果^{4) 5)}と比較しても、この値は平均的であるといえる。カットオフポイントを大きく上回る生徒もみられたが、本対象集団の精神心理的健康度が至って一般的なレベルであったことを標準偏差範囲内のスコア分布が示している。学年間比較では、1年生が最も高く、3年生が最も低い値になっていた。この点は、1年生においては新しい環境や新しい人間関係に対して使用される適応エネルギーが多く、これにより相当量のストレスが発生したことが窺われる。一方、3年生の得点が進路選択直前であるにもかかわらず最も低かったことは、先行報告⁴⁾と異なっていた。性別間比較では、女子のCES-D得点が高くなっていたが、これは先行報告⁴⁾と同様であった。ここまででは、種々の先行報告と大きく異なる傾向ではなく、本対象者は、我が国の思春期として代表性の高い集団であるといえる。

部活動への参加・不参加によるCES-D得点の比較を行なったところ、不参加の方が高い抑うつレベルを示した。運動部活動のキャリアとCES-D得点との関連性については、その著しい有意性が確認⁴⁾されている。すなわち、中学校から高等学校を通して一貫して部活動を行なった者ほど良好な精神心理健康レベルを有しており、途中退部や一貫して不参加だった者に比べると、明らかな差があったことが確認⁴⁾されている。この例に鑑みると、本対象校においても、運動部活動による精神心理健康レベルが向上するという効果が窺われる。

本対象者の発達段階は思春期であり、心身のアンバランスが顕在化しやすい時期である。すなわち、諸個人によって差異が大きいと考えられる年齢であることから、本研究で明らかとなつた学年や性別、もしくは部活動への参加・不参加によって差があることは、至極、当然であるともいえる。しかしながら、学校保健管理の視点に立つとするならば、学年別・性別・部活動参加別などの違いに応じた方法で、思春期の健康維持増進を講じる必要を窺うことができる。いずれの視点に立脚するにせよ、課外活動である学校運動部活動が中学生の精神心身健康レベルに関連していたことは、学校保健の推進上、興味深い事実である。ただし、本結果は、ある一時点の様相を反映しているにすぎない。今後、同一集団を追跡するなど、正確で縦断的な評価を行なうことが必要である。

2. 生活満足感および学校生活満足感・部活動満足感

生活満足感を構成する3つの下位尺度得点は、性別間・学年間に有意差を示さなかった。したがって、「全般的生活満足感」・「友達関係満足感」・「学校生活満足感」に対する満足感は、性別・学年を問わず、共通性の高い主観性であると推察される。

学校生活満足感を構成する4つの下位項目群には、属性間で因子合成得点に差が見られたが、性別による違いよりも学年による違いの方が高い影響度を有することが窺われた。とりわけ、2年生にその傾向は顕著であった。学校生活満足感でも4因子が抽出されたが、これら因子構造の分散説明量は、独自作成による尺度としては特段に高い値であった。因子解釈においても、因子負荷パターンや各因子を構成する項目の収束性などに凡そ問題は見られなかった。この因子構造の頑健性を確認するためには、今後、さらなる検討が必要である。

部活動満足感からは、7因子が抽出された。ここで示された累積寄与率は、大変に満足すべきものであり因子的な弁別性にも全く問題はないと考えられる。各因子合成得点を属性別に算出したところ、群間の有意性が見出された。性別間・学年間で共通して有意性が示されたのは、第1因子「部活動に対する否定的感情」、第2因子「自信喪失・自己無力感」及び、第7因子「主体的な向上心」であった。この3因子は、1年生に比べて、2・3年生が高く、また、男子よりも女子の方が高いという傾向を示していた。この点より、学校運動部活動を円滑に運営・推進していく上で、1) これら3因子が包含するような事柄を注視すること、2) 学年や性別によって重点の異なる対処していくこと、が必要と考えられる。

3. 抑うつ症状レベルと各関連要因との関連性

抑うつ症状レベルと各関連要因との関連について分析を行なったところ、複数の有意性が検出された。しかしながらその傾向は、学年間・性別間で異なっており、双方の関わりを検討する上では、必ずしも十分な統計的説明力を認めるには至らなかった。視点を変えれば、抑うつ症状レベルのみならず満足感というものは、諸個人によって異なっている方がむしろ当然である。この種の変数間において、属性に応じた関連パターンを見出すことは難しいのかもしれない。

そこで筆者らは、線形関係を基にした分析から趣を変え、G-P分析を適用した。その結果、抑うつ症状レベルと部活動満足感との間にある関連性において、いくつかの興味深い知見が得られた。例えば、部活動満足感において、「Poor」数が少ない（「Good」を多く有する）者ほど、精神心理健レベルは良好であり、「Poor」数が増えるにしたがって、精神心理健レベルが低下することが明らかとなった。加えて、部活動に参加していない者は、他のグループ（部活動参加群：良好群・普通群・不良群）よりもCES-D得点が高かった。この傾向には、運動部活動キャリアと精神心理健レベルとの有意な関連を報告した研究結果⁴⁾と同様の意味が含まれていると考えられる。さらには、ある先行研究⁴⁾では、キャリア（運動部活動継続歴）という連続量的要因に着目しているが、本研究では、満足感という質的要因も中学生の精神心理健レベルに影響することが示された。また、「Poor」数が多いほど、「学業不振」を訴える傾向が示されたこと、あるいは「友達からのいじめ」が多い傾向が示されたことも興味深い。今後、さらなる検討が望まれる。

以上、学校運動部活動に目を向け、その実情を評価・検討して具体的な課題を抽出していくことは、運動部活動を学校保健活動の一環として捉えることにも繋がる。これらにて見出された課題を解決しながら、分析-評価-検討-課題抽出-解決-新たな課題-分析、という循環システ

ムを構築することが、生徒の心身状態レベルの維持増進や健康生活設計に大きく寄与すると考えられる。

V. まとめ

本研究では、宮崎県内某公立中学校生徒の精神心理健康レベルと、学校生活および学校運動部活動における満足感の構成要因を探索するために、質問紙調査を行なった。回答データの分析・検討により得られた主要知見は、1. 全体のCES-D得点は平均的であるものの、平均点以上の者が比較的多かったこと、2. 学校運動部活動に参加している者は非参加者に比べて精神心理健康度が高かったこと、3. 学校生活満足感および部活動満足感の因子分析で、それぞれ4因子、7因子を高い累積寄与率で抽出できたこと、4. 各満足感項目の学年間・性別間比較で、ともに有意な関連があったこと、5. 部活動満足感を多く感じる者ほど、精神心理健康度が高かったこと、6. 中学生の学校運動部活動に対する満足・充足感には、質的な要素が十分に対象となること、である。その他、縦断的・経時的な追跡調査の必要性や学校運動部活動に対する運営システム改善の必要性を述べた。

VI. 謝辞

末尾になりましたが、対象校の生徒の皆様に深甚の謝意を表します。また、質問調査票の配付、回収をして下さいました諸先生方、ならびに宮崎大学教育文化学部学校保健研究室の所属学生の皆様に深謝致します。

VII. 文献

- 1) 安藤延男：学校社会のストレス　学校生活のストレス（安藤延男編）p11-24 垣内出版、東京、1985
- 2) 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美：中学生用学校ストレッサー尺度心理測定尺度集III 心の健康をはかる〈適応・臨床〉，p15-19，サイエンス社、東京、1992
- 3) 古市裕一：学校嫌い感情測定尺度 心理測定尺度集III 心の健康をはかる〈適応・臨床〉，p389-391，サイエンス社、東京、1992
- 4) 玉江和義・谷口勇一・吉田 肇：福岡県内某公立高等学校1年生における精神健康と疲労に関する探索的研究－中学校からの運動部活動歴との関連性の検討－九州大学健康科学センター健康学科、第20巻別冊、1998
- 5) 玉江和義・谷口勇一・照屋博行：中学校時代における運動部活動の印象に関する探索的研究－公立高等学校1年生を対象とした後ろ向きデザインの適用－福岡教育大学紀要、第47号、第5分冊、別刷、1998
- 6) 玉江和義：CES-D適用による中学生の抑うつ症状保有程度の分析－持続症状に着目した検討－宮崎大学教育文化学部紀要、芸術・保健体育・家政・技術、第7号、p41-50、2002
- 7) 尼子（長野）陽子・玉江和義：宮崎県内某公立小学校児童の精神レベルと身体活動能力にかかわる要因の検討、宮崎大学教育文化学部紀要、芸術・保健体育・家政・技術、第15号、1-9頁、2006
- 8) 鈴木有美：自尊感情と主観的ウェルビーイングからみた大学生の精神的健康－共感性およびストレ

- ス対処との関連－名古屋大教育発達科学研究紀要, Vol.49, p145-155, 2002
- 9) 西島 央・藤田武志・矢野博之・荒川英央・羽田野慶子：中学校生活と部活動に関する社会的研究
東京大学大学院教育学研究科紀要, 第39巻, p137-163, 1999
- 10) 徳永敏文・山下立次：中学校運動部活動に関する調査－運動部顧問教師における体育教師とその他の教師との比較研究－岡山大学教育学部研究紀要集録, 第115号, p87-99, 2000
- 11) 内海和雄：I スポーツのなかの少年期 がんばれスポーツ少年シリーズ 少年期との対話2 p71.
145, 新日本出版社, 東京, 1987年
- 12) 吉本二郎 小林一也編集：現代学校教育全集第10巻 クラブ部活動, 東京, 1979年
- 13) 波越一喜・藤井和彦・谷藤千香・井崎美代：運動部活動経験が大学生のスポーツ生活に与える影響
千葉大学教育学部研究紀要, 第51巻, p129-136
- 14) 澤口裕太・関岡康雄：運動部活動における活動意識に関する研究－中学校運動部活動参加者を対象として－仙台大学大学院スポーツ科学研究科研究論文集, Vol.4, p41-47, 2003
- 15) 小牧元・前田基成・久保千春：中学校・高等学校における生徒の心身の健康状態－養護教諭に対する調査から－, 思春期学ADOLESCENTOLOGY, Vol.13, NO.4, 1995
- 16) 三浦正江・坂野雄二：中学生における心理的ストレスの継続的变化, 教育心理学研究, 第44巻, 第4号, p368-378, 1996
- 17) 今村幸恵・服部恒明・中村朋子：中学生のストレッサー, 自己効力感, ソーシャル・サポートとストレス反応の因果構造モデル, 学校保健研究, 45, p3-15, 2003
- 18) 岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二：中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果, 教育心理学研究, 第41巻, 第3号, 1993
- 19) 城丸章夫・水内 宏：スポーツ部活動はいま 青木書店, 東京, 1992
- 20) 文部省：中学校学習指導要領解説－保健体育編－, 平成11年9月
- 21) 玉江和義・岩田 昇・永田頌史・照屋博行：北九州市内公立中学生の自覚症状とその関連要因に関する研究－生活上の事柄との関連性の検討－, 学校保健研究, VOL.40, p19-28, 1998
- 22) 高倉 実・崎原盛造・與古田孝夫・新屋信雄：中学生における抑うつ症状と心理社会的要因との関連, 学校保健研究, 42, p49-58, 2000
- 23) 高倉 実・栗原 淳・堤 公一・玉江和義・宜野座奈子・田中麻子・伊佐あゆ美・比嘉桃子・吉里 目和：思春期集団における抑うつ症状とその関連要因についての地域比較研究, 平成15年3月
- 24) 佐藤昭三・竹内一夫・青木繁信・鈴木庄亮：質問紙によるS市立中学校生徒の精神的健康とライフスタイルの7年後の変化, 学校保健研究, 39, p 393-401, 1997